

宇部の神様と呼ばれた石炭王、 渡辺祐策翁の事績を訪ねて

山口県宇部市 宇部市ふるさとコンパニオンの会

以前、「宇部歴史文化紀行」という記事の取材のために、宇部を訪れたことがあった。そのとき聞いた渡辺祐策わたなべすけさくという人のことをもっと知りたいと思って、再び宇部を訪れ、JR宇部新川駅近くの渡辺翁記念会館の前に立った。戦前の前衛建築として有名な音楽ホールで、その前に渡辺翁記念公園が広がり、公園の一角の渡辺翁のブロンズ像が地上12mの高さから、南の海岸に広がる工場群を見渡している。豊かな髭、堂々とした体躯。その奥にやさしさの見える人である。宇部の石炭王で、石炭をかわきりに、このまちに豊かな暮らしを花開かせた。この人物を、人々は「宇部の神様」とも呼んだ。1年半前に案内していただいた、宇部市ふるさとコンパニオンの会会長の脇彌生わきやよいさんに、あらためて渡辺祐策の事績を解説してもらった。脇さんは、地元紙「宇部日報」の社長の夫人。20数年前から地元の歴史の面白さのとりこになって勉強をはじめ、いまは観光ボランティアガイドとして30人余のメンバーを率いている。

■宇部のことは宇部で決める

渡辺祐策は1864（元治元）年に生まれた。幼年時代の姓は国吉という。農民でありながら苗字帯刀を許され、庄屋の補佐役、



脇彌生さん

くろがしら
畔頭くろがしらを務めていた。祖父の代に集落の大半を焼き尽くす火事を出して財産を失い、生活は豊かではなかった。祐策が4歳の時、父、国吉恭輔は土族株を買い、渡辺家を継いで渡辺姓となり、宇部の領主で、長州毛利氏の家老、福原氏の家臣となった。

祐策が生まれたこの年、京都で「禁門の変」が起きた。福原家の当主、福原越後は、長州軍の総大将として御所に向かって進軍中、敵の銃弾に倒れ、長州に逃げ帰った。戦いに敗れて朝敵となった長州に、幕府は征長軍を派遣。その全権大使となった西郷隆盛との会談の結果、長州藩は藩主毛利氏



渡辺翁記念会館全景



渡辺祐策翁銅像

親子の身代わりに、禁門の変の首謀者として3人の家老に切腹を命じた。その1人が福原越後だった。変に加わったのは藩主の命に従った結果だったが、罪状に「不忠不義」とあったことに福原越後は納得できず、「これからは自分たちのことは自分たちでせよ」と遺言して自刃した。

もはや萩からの指示を待つことはない。宇部のことは宇部で決めていけばよいという意味と思われた。それ以来、宇部の福原の家臣たちはいっそう結束を強め、明治の廃藩置県を経て、宇部は独自の道をすすむようになった。

■炭鉱を管理した宇部共同義会

宇部の沿岸部から石炭が出た。地表付近の石炭は容易に掘り出すことができ、住民は昔からそれを煮炊きに利用していた。塩田開発がさかんになると、石炭は塩をつくるために海水を煮詰める燃料として利用されるようになり、明治に入ってから蒸気船や鉄道、工場の機械を動かす燃料としての需要が一気に高まって、沿岸部だけでなく海の中まで掘りすすんで採掘するように

なった。

幕末、長州藩は石炭局を置いて、石炭の採掘権を管理した。しかし、明治に入って「日本坑法」という法律ができて鉱物資源はすべて国の所有となり、民間は国から採掘権を託された者だけが採掘できることになった。その採掘権の管理を、長州藩石炭局の役人だった西隣の小野田の福井忠次郎が独占したため、宇部の人たちは石炭を掘るのに高い斤先料を支払わなければならなくなかった。

自刃した福原越後の娘婿で、福原家の後継者となった福原芳山よしやまという人がいる。この人物が年1300円で8年間、総額1万4000円で、福井忠次郎から石炭鉱区を買取り、芳山を社長とし、福原家の旧家臣たちによって構成される石炭会社を設立。以後この会社が、宇部の炭鉱を管理するようになった。しかし、炭鉱事業者が乱立して維持管理が難しくなり、芳山が法律家としての道をすすんだこともあって、この石炭会社はいったん閉鎖。あらためて福原家旧家臣を中心に「宇部共同義会」という組織がつくられた。維新後、藩からの俸禄ほうろくを失っ

た旧士族は困窮していたが、「宇部共同義会」はその旧士族、福原家旧家臣の互助会ともいうべき組織だった。さらに「共存同栄」という理念を掲げ、石炭採掘の利益は旧家臣だけでなく宇部村全体に還元すべきとした。

「宇部共同義会」と並んで「宇部達聡会」という組織もつくられた。福原家旧家臣のほか宇部村内の5つの集落の代表者が参加しており、宇部という地域の政治的意思決定に大きな役割を持った。ここでの決定は村議会でそのまま了承され、県会議員や国会議員の候補者もここで決めた。これらの組織を通じて、宇部のまちは、旧士族のほか庶民まで含めて、経済的にも社会的にも政治的にも強い結びつきを持つ共同体となった。

■石炭が出るまでの苦難の日々

渡辺祐策が14歳のとき、父が亡くなり、祐策が家督を継いだ。それまで学んだ岩国の陽明学者、東ひがしたくしゃ沢瀉の塾を退き、上京して進学する夢を断念して、家族を養うために田畑を耕した。20歳で戸長役場用掛となって俸給を得るようになった。

25歳のとき、石炭の採掘権を買って炭鉱経営をはじめた。最初は堀田山炭鉱、二度目が本山炭鉱である。しかし、なかなか石炭に行き当たらず、ようやく行き当たっても質が悪かったり、水が出て、それを手当てするために出費と借金がかさみ、経営の

継続が困難になって閉山するということが二度繰り返した。

その後、自宅を取り壊して田畑に変え、自分たちは蔵で生活しながら田畑を耕し、妻は海辺でマキ用の松葉を拾って生活を支えた。そんな生活の傍らで、祐策は三度目の炭鉱事業を起こすために、村役場や知人宅の間を奔走したという。

「二度も失敗してまだ懲りんのか」「莫大な金を使うて、お前はこの村を貧乏にしよる」と言う者もいた。「いや、そうじゃない。石炭は宇部の宝だ。このまちは必ず石炭によって発展する。必ず成功させてみせる」。現代の小中学生のための読本「山口の先人たち」は、渡辺祐策がそんなふうに言ったと伝えている。

1897（明治30）年、34歳の渡辺祐策は、田畑を抵当に入れて金を借り、出資を募って資金をつくり、沖ノ山炭鉱を創業した。海岸近くの小高くなったところで、まちの中心部から見ると海の中に突き出た山のように見えたことから「沖ノ山」と呼ばれたという。しかし、ここでも最初に出た石炭は、塩田用にしか使えない質の悪いものだった。さらに砂地で地盤が弱かったために落盤事故が起り、犠牲者が出た。それでも石炭に行き当たらず、資金繰りに窮してさらに借金を重ね、新株を発行し出資者を募り、なんとか事業を継続した。石炭が出るのは、さらに先のことである。

落盤事故で犠牲者を出して以来、祐策

は、毎朝まだ暗いうちに家を出て坑内に入り、自らくまなく点検して安全を確かめることを習慣にした。また、石炭を地上に上げるための機械の蒸気で蒸し風呂のようになって坑内で働く1人ひと



沖ノ山炭鉱（左）と渡辺祐策翁写真
（炭鉱を記録する会監修「炭鉱データベース」より）



りの手を取って、「苦勞をかけるな」「ありがとう」と勞をねぎらったと言われる。

■利益をインフラ整備にあてる

4年が過ぎ、ようやく良質の石炭層にまで掘りすすめ、大量の石炭が掘り出されるようになった。1901（明治34）年、沖ノ山炭鉱は第1回の配当を行い、その後の石炭産出量は飛躍的に伸びた。祐策はその後も次々と炭鉱を開発し、生涯で24の炭鉱経営に関わったといわれる。大正年間には、沖合に大規模な人工島「百間角」を建設し、そこから海底炭坑を掘削した。

大勢の炭鉱夫とその家族が宇部に移り住むようになって、1887（明治20）年に6500人だった宇部の人口は1921（大正10）年には4万人を数え、この年、宇部村は町制を経ずにいきなり宇部市となった。山口県内では下関市に次いで2番目の市だった。

他地域の石炭王が豪邸を建て、贅の限りを尽くしたのに対し、渡辺祐策の生活はいたって質素だった。宇部共同義会の「共存

同栄」という方針もあり、石炭の利益のほとんどを地域のインフラ整備にあてた。たとえば、石炭のエネルギーを電気に変えるための火力発電所を立ち上げ（1909年）、鉄道を敷設し（1914年）、上水道を建設し（1924年）、港を築き（1927年）、多くの学校や病院を建てた。

福原家旧家臣の1人として祐策は、宇部共同義会、宇部達聡会、宇部村会の要職を引き受けていた。1912（明治45）年からは宇部達聡会から推されて衆議院議員になり、その後3期を務めている。実業家でありながら同時に政治家でもあったことが、祐策に世の中全体を視野に入れた生き方を促していた。

しかし、1918（大正7）年に富山県で起きた米騒動が宇部に飛び火したとき、他地域から流入してきた坑夫たちにとって、鉱山主は米を売り惜しむ悪徳米穀商と同類としか見えていなかったようだ。他地域の騒動に触発された数百人の坑夫が「鉱主の首をもらおう」と叫びながら祐策の屋敷を襲

い、狼藉の限りを尽くした。祐策は家族とともに裏の松林に辛うじて難を逃れたという。暴徒はさらに村内の米問屋、富裕層宅、遊郭などを次々襲い、火をつけて回った。最初の数百人は1万余人にまでふくれあがり、軍隊まで出動し、死者13人を出す惨事となった。

事件から数ヵ月後、祐策は宇部に村立中学校を設立することを提案した。日頃から坑夫たちを大切にしてきた祐策だったが、その思いの通じない人たちが大勢いる。その心を開くには教育しかないと考えたのである。宇部達聡会はその提案を了承し、村立宇部中学校の設立が決まった。現在の山口県立宇部高等学校である。

このことについて当時の「宇部時報」(現「宇部日報」)は次のような記事を載せている。「人生不遇^{らくはく}落魄、その身分は車夫となり坑夫となり道路商人とまで零落したりと^{いへど}雖も、せめてその子には高等の教育を与へ、一家を再興せしめたしとの美しき希望を有する者は来れ、宇部はこれらの人々の為に、その職を与へ、児女を教養してやるべし」

■石炭が尽きた後のことを考える

石炭の埋蔵量は有限で、いつかはなくなる。それを掘り尽くす前に、有限の鉱業から無限の工業へ転換を図らねばならないと祐策は考えていた。「爺らが代には炭を掘り尽くして、おまらあの時には何もないと

孫に言われちあならん、長う続く仕事も残しておいてやらにや」。常々周りにそう洩らしていたという。

そうした考え方から、炭鉱業と並んで工業を興すことに力を注いだ。1914(大正3)年には「宇部新川鉄工所」を設立。炭鉱で使用する機械はすべて外国からの輸入品だったが、この会社で修理、メンテナンスができるようにし、やがて機械を自社製作できるようにした。次いで「宇部紡織所」を設立した(1917年)。炭鉱は男性の職場だったが、女性にも仕事を与えるためだった。1923(大正12)年には「宇部セメント製造」を起こした。北隣の美祢の石灰山から石灰を採取し、石炭から出るボタや灰も併せて利用してセメントをつくった。

人生の最後に、化学肥料の製造に力を注いだ。その方法を研究するために、俵田明らに欧米視察を命じ、1933(昭和8)年には「宇部窒素工業」が設立された。翌1934(昭和9)年には祐策の腸内で腫瘍が見つかり、この会社で黒い石炭からつくり出された最初の白い化学肥料、硫酸を入院先の病院で確認した数日後に、祐策は70歳で永眠した。

1942(昭和17)年、沖ノ山炭鉱、宇部鉄工所、宇部セメント製造、宇部窒素工業の4社は合併して宇部興産となり、化学肥料研究のために欧米を視察した俵田明が初代社長となった。宇部市内の炭鉱は1967(昭和42)年に閉山。現在の宇部は、化学工業

のまちとして繁栄を続けている。

■ばいじんの町から花と緑と彫刻のまちへ

宇部共同義会や宇部達聡会は、旧福原家臣を中心とした地域をあげた組織だったが、地域の各層が参加して課題解決するというすすめ方は、このまちに深く浸透し「宇部方式」と呼ばれている。脇さんは、最後に次のような話をしてくれた。

戦後の「宇部方式」は、1950年代の公害問題への対応が代表的だった。当時の宇部は「世界一灰の降るまち」で、石炭によるばいじん汚染が深刻化していた。これを解決するために、市民、企業、学識者、行政を代表する「対策委員会」が組織され、その一致協力によって、1977年には、ばいじ

ん汚染を最悪期の8分の1にまで減らした。

その延長線上で、市民の中に「まちを花でいっぱいにしよう」という緑化運動が起こった。その運動の中で婦人団体が集めた寄付、20万円の中から、市は花の種を買い、残った10万円で、著名なフランス人彫刻家の作品のレプリカを購入して宇部新川駅前に設置した。そこからさらに、レプリカではなく本物の彫刻を飾ろうという運動が起こった。こうして1965年から2年に1回の「現代日本彫刻展・UBEビエンナーレ」がはじまり、現在まで続いている。

※本稿の作成に当たっては、堀雅昭著『炭山の王国－渡辺祐策とその時代』（2007、宇部日報社刊）、『郷土の発展につくした人々・山口の先人たち』（1986、光文書院刊）を参考にしました。

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中

*

*

*